

相談でもカウンセリングでもない、インタビューの力

川畑恵子

新聞紙面の記事でお名前を拝見したことがある理子先生のお話を聞くことができて、貴重な機会でした。

パソコンを使ってメモを取るときの注意点については、まだ紙の資料とノートが普通だった頃にパソコンを使う人がいると視線が合わないことがとても気になっていたものですが、すっかり慣れてしまっている自分を再認識しました。仕事の打ち合わせはさておき、インタビューでは話し手にとってどうか最優先。できるだけ話さないように、どうしても話すなら「私も」ではなく「私は」等々、まさに作法と極意の講義でした。私はどうも、無意識に「うん、うん」と頷く相槌が無意識に声になっているようで、指摘を受けたことがあるのですが、「邪魔にならないように相槌は目で」も気をつけなくてはと改めて思いました。

第1回のゆきさんから今回の理子先生まで、講師の先生方のお話を聞いていて、どの方もお話しぶりや声のトーンの心地よさを感じています。

ゆったりと落ち着いていて、内容はつまっていてもせわしい感じがしない、そ

してメッセージが力強い。つながりや関係性の中で「にできること」に集中して、攻撃や批判でない。うまく言葉にすることができないのですが、私が感じているそうした共通項は、まさに「新しい挑戦、つなぐ、変える」を実現する秘訣の1つなのかもしれません。

グリーフケアを2年かけて学ばれ、トラウマを抱えた人のインタビューをされてきた理子先生のお話には、相談やカウンセリングにおける「面談」に求められる要素が含まれていました。対象者や内容にもよりますが、インタビューの結果、それが記事や原稿にならないとしても、「対話」として成立していれば、その時点で意味があるというインタビューもあるかもしれません。インタビュアーが多く語り、やり取りをするキャッチボールのようなことではなく、問われたことに答えながら話し手が自分自身と対話し、インタビュアーの相槌やリフレクティングによって自分自身について確認したり、整理したり、言語化したりしていくことは、聞き手と話し手の共同作業。そして、そこから生まれたものを伝えていく。それがまた、次の新しい対話につながる。インタビューというのは、そういう営みなのだと思います。